KSKQ第三種郵便物認可<サロン・あべの>通巻5959号2008年7月19日

一九九一年九月三日第三種郵便物認可（毎日発行）

母を語る
――ハハ、のんきだね

〈サロン・あべの〉6月の出会い

梅雨の晴れ間に恵まれた6月21日（土）午後1時～4時、育徳コミュニティーセンター2階・研修室において、稲垣恵雄（＝写真次頁）さんをお迎えして「母を語る ――ハハ、のんきだね」と題して、ご自身のお母さまのお話をしていただき、ひきつづいて、創作童話「まんまるおにぎり」を語っていただきました。この作品は、わたぼうし文学賞・語り部賞・ひろしま随筆賞を受賞しています。

なお、稲垣さんは、本紙にコラム「晴れのち晴れ」をかれこれ10年、毎月欠かさず寄稿くださっています。そのコラムには根強いファンもたくさんいらっしゃいます。（題字＝稲垣恵雄）

第1部

母を語る

――ハハ、のんきだね

みなさん、こんにちは。ここへ寄せてもらうのは今日で3回目です。今回は「母を語る」というテーマでお話させて頂きます。

最初にお断りしておきたいのですが、私はどうしても「母」と言いにくいので「お母さん」と呼ばせて頂くことをご了承ください。

□母の性格

私の母、文子は大正元年生まれの子年ですので今年の10月で96歳になります。母は小さい時には身体が弱かったので、ドクターから20歳ぐらいまで生きられたら良いですよ、と言われていたそうです。ところがどっこい96歳になろうとする今でも元気ですので、70年余り長生きしていることになります。

私の実家は仏教寺院ですので父が住職で母が坊守でした。でも昭和18年4月に父の元へ召集令状が届いたので、戦地のニューギニアへ赴いていきました。その間、母は父の代務者として檀家の月忌参りや毎月の法座を開いたりして寺の切り盛りをしていました。

このようにただでさえ多忙な母なのに、その上身体の不自由な私の面倒をみなければならなかったので大変でした。そんな中で昭和20年1月から週に1度母は私を背負って柏原の法善寺までマッサージに連れて行ってくれました。

マッサージに通い始めて1ヵ月ぐらいたったある日のこと。もう

すぐ法善寺駅につくという時、私たちの乗っていた車両の床から突然煙が出てきて電車は止まってしまいました。すると車掌さんが「乗客のみなさん、危険ですので降りてください」と車内放送があると、電車のすべてのドアーが開きました。その瞬間、どの客も我れ先に線路の上に飛びおりました。

いつもは空いているのにその時はたまたま混んでいたので、母は私を背負ったまま立っていました。そのために乗客が全部おりても母はおりるどころか「あゝしんど、やっと座れたは…」と1人つぶやくようにして座席に腰かけるではありませんか。

それからしばらくして煙は出なくなったので乗客がまた乗ってきました。こうしたハプニングがありましたが、乗客の誰1人としてケガがなかったのが幸いでした。電車は10分ほどおくれて法善寺駅へ到着しましたが、私たちはいつも通りマッサージをしてもらうことができました。

私は当時3歳でしたので何も分かりませんでしたが、物心ついてからこの話を聞いて「何と呑気な母なんだろう」と自分の親ながらあきれてしまいました。

呑気と言えば、こんなこともありました。どこの親もそうですが、母も毎日、洗濯をします。ある日、母は私を背負って庭で洗濯物を干していました。その時、母は手をすべらせて物干し竿を落としてしまったのです。「あゝ、良かった。私に当たらなくて…」と母はそう思ったとたん、ギャッ!と、火がついたように私が泣き出したそうです。申すまでもなく私の頭に物干し竿が落ちてきたのです。あまり頭が良くないのは、その時の後遺症なのかも知れません。

さらにこんなこともありました。私はムリですが、母はどこでも寝ることができます。かなり前のことですが、妻が病気で入院していた時に私は母と見舞いに行きました。その時、母は妻としゃべっていたのですが、いつのまにやらいなくなったのです。ふと見ると奥の空きベッドで母はスウスウ寝息を立てながら眠っているではありませんか。「これではお見舞いに来たんか、寝に来たんか分かれへん」と私は妻と苦笑いをしました。

□母の趣味

こんな母ですが、母は学生の頃(昭和10年代)には友人と何度も槍ヶ岳や白馬などの高い山に登ったりスキーに行ったりしていました。そして月に1度はクラシックコンサートを聞きに行ったり、美術館へ足を運んだりして当時としてはハイカラなお嬢さんだったようです。

母はまた字も絵もたいへん上手でした。中でも字は力強くてはっきりと書くので誰が読んでも分かりやすく、1度習字のコンクールで銀賞をもらったこと

もあります。それだけに父の手紙の代筆からすべての書きものは母がしていました。

□3つの言葉

親として当然のことですが、私も母からいろいろ教わりました。そんな中で次の3つの言葉が今でも忘れることができません。

1つ目は信仰心が厚くて仏法をよく聴聞していた母は「人間というものは他人のことはよく分かっても自分のことは分からないものよ。だから例えば鏡を見るのではなく鏡を通して自分の姿を見るように仏法をきいて私というものを分からせてもらうのよ」と言っていました。

2つ目は「人間関係は煩わしいものよ。でも心なごみ、心いやされるのも人間関係なのよ」とよく言っていました。

ともすれば私たちは「人間関係は煩わしいもの」という考えが強いですが、母の言うように毎日の生活が穏やかに過せるのも人間関係なんですね。

3つ目は「文学でも音楽でも美術でも常に最高の作品に接していきなさい」と事あるごとに言っていました。

この3つだけはなるべく実行したり、思ったりするように心がけています。

□母の近況

最初に申し上げましたが、母は身体の方は元気なんですが、数年ぐらい前から認知症になり、ほとんど記憶がないようです。そんな中でも私の顔を見て「あんた誰や？」と言われるのが一番つらいです。でも母は小柄でいつもにこにこしているので、お世話になっているヘルパーさんに「文子さんはいつ見てもかわいいねえ」と言われているのが、私にとってもうれしくて何よりの救いです。

ところである高僧が　10億に10億の母あれど、我が母に勝る母なし」とおっしゃっています。これはどんな人でもお母さんのお腹から生まれ、育てられますが、自分のお母さんが最高です、という意味です。私もまったく同感で、お母さんには感謝の気持ちでいっぱいです。

なんだかとりとめのないことばかりお話いたしましたが、母に対する私の正直な気持ちです。

ここで10分ほど休憩して、そのあと「まんまるおにぎり」を語らせていただきます。

第2部

創作童話　まんまるおにぎり

タカトは毎日、お母さんにおにぎりを作ってもらって、ようちえんに持っていきます。

タカトは、おにぎりが大好きです。その中でも梅干が入っていて、味付けのりをまいたおにぎりには目がありません。

いつもお母さんは台所で、いそいでおにぎりをにぎります。でも今日は日よう日なのでタカトのいる居間で、ゆっくりとていねいにおにぎりをにぎってくれました。

お母さんは、始めに電気がまからぬくぬくのごはんをボールのうつわにうつして、テーブルの上におきました。その横に梅干の入ったパックと味つけのりの入ったびんがおいてあります。

タカトはテーブルをはさんで、お母さんの向かい側にすわると、静かに見ていました。

お母さんは「マツケンサンバ」の歌をうたいながら、おにぎりをにぎりました。

オーレオレ　マツケンサンバ
オーレオレ　マツケンサンバ

するとタカトは立ちあがり、お母さんの歌にあわせて　体をね

じったり、手足を動かしたりしておどり始めました。

お母さんはおにぎりに梅干を入れ、ギュッとさいごに力づよくにぎると「オーレ」とひときわ大きい声でいいました。

タカトはその声をきくと、ピタッとおどるのをやめました。

「はい、できあがり…」

お母さんはおにぎりに味つけのりをまいてタカトの手のひらにのせました。

「うわあ、すごい！」

タカトはいつもより大きい目のおにぎりをガブッとかじりました。

「どう、お味は？」

「すっぱいけど　さいこう！」

タカトは顔をしかめながらも、左手でVサインをおくりました。

「梅干が入ってるから、すっぱいのは当然よ」

お母さんはそう言うと、２つ目のおにぎりをにぎりました。

そしておかあさんは、「あのね、タカト…」と言ったあと、少し間をおいてこんなことを聞きました。

「おにぎりのことをおむすびとも言うでしょう。どうしてそう言うか知ってる？」

「う、うーん…」

タカトは首を横にふると、残りのおにぎりを食べました。

「じゃあ、教えてあげる。それはねぇ、タカトとお母さんがはなればなれになっていても、２人はしっかり結ばれていますように、との願いをこめてにぎるからおむすびと言うのよ」

「ふーん、ぼくがようちえんに行ってもお母さんとしっかり結ばれてるんだね」

とタカトがあまえた声で言うと、お母さんのそばへよって行き、何回もほおずりをしました。

（参加者17名　冨田慶子）

お知らせ

＜サロン・あべの＞８月の出会い

内　　容：バザーの店「さろん亭」を開店
サロングッズや、タオル、石鹸などお買い得の品 を山積みにして、みなさまのご来店をお待ちしています。

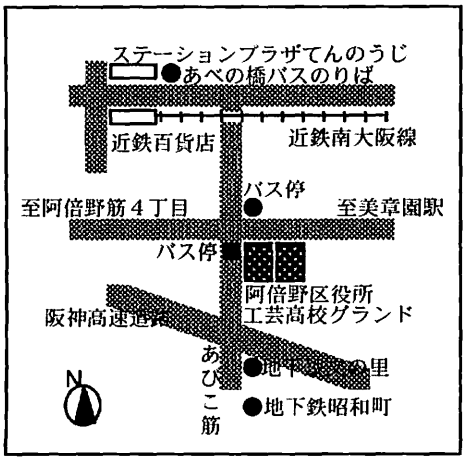
日　　時：８月３日（日）午後３時～６時

場　　所：あべのカーニバル
なんでも市会場
大阪市阿倍野区文の里1-1-40
阿倍野区役所裏、工芸高校グランド

交　　通：地下鉄御堂筋線
「昭和町」駅北へ10分
地下鉄谷町線
「文の里」駅北へ５分
市バス・赤バス
「阿倍野区役所」停留所前

＊当日の販売のお手伝いをしてくださる方、品物をご提供いただける方、ご連絡お願いします。

問合せ先：☎ 06-6691-1028（冨田慶子）



8/3

今年の夏も
あべのカーニバル
さろん亭で
会いましょう！

さろん亭

あべのカーニバル
なんでも市通り

連絡先　冨田慶子　545-0021 大阪市阿倍野区阪南町6-3-26 TEL/FAX 06-6691-1028

46

邦子、‥ん歳の手習い。

障害者自立生活運動との出会い

1981年の国際障害者年は、世界規模での障害者の人権啓発活動を行うために国連によって設定されたものでしたが、「障害者の完全参加と平等」をテーマにしていました。その年は、テレビでも、日本や世界の障害者が活躍する画像の広告が流され、全国でも多くのイベントが行われ、障害者にとって活気あふれる年だったことを記憶しています。私の夫も、障害者として教職に復職してから4年後に国際障害者年に遭遇しましたが、障害当事者として、多くのイベントに参加させていただきました。その年は、障害者家族の私にとっても、障害者が主役に躍り出たかのような感じがして、楽しかったことが思い出されます。

1981年には、アメリカの障害者自立生活(IL)運動の創始者のエド・ロバーツが来日し、IL運動が紹介されました。また、1983年には、「日米障害者自立生活セミナー」も行われ、海外の障害者との交流も始まり、日本でもIL運動への関心が高まっていきました。夫の障害者としての社会復帰は、障害者にとってこのような新しい流れが押し寄せてきたそんな時期から始まりました。しかし、その頃は、夫は障害経験も浅く、先輩障害者から、障害者としての生活の仕方などを一生懸命学び、障害者としての生活力を獲得することで精一杯という感じで、まだ新しい障害者運動の潮流の中で活動することもありませんでした。

そんな夫をその運動の関心へと向かわせたのは、1987年から1年間のアメリカカリフォルニア州のバークレー大学への留学でした。夫は、バークレーでの印象について、「バークレーの印象は、行く前から重度障害者の自立生活運動のメッカというか拠点という思いでいったんですけど、僕の想像よりもはるかに鮮烈な印象を受けましたね。では、どういう印象かというと、重度の障害者がね、僕も重度で自信があったんですけど、その自信を砕かれるような手がまったく動かないような障害者が、自力で街を車イスで通行していたのが、びっくりしましたよね。日本では、重度障害者は介助者と一緒にいるのが当たり前ですけど、バークレーの街では、どんな重い障害があっても、電動車イスで1人で移動して、それが自然であり、自立であるというような、そんな自立を尊重する街づくりという印象が強かったですね」と語っています。重度障害者が1人で街に出て行けるのは、車イスでも利用できる住宅や道路のアクセスであり、電車・バスなどの交通アクセスでした。また、飲食店やお店など不特定多数の人が日常生活で利用するところまで、ほとんど電動車イスで行けるように工夫されていることでした。

「バスでも、地下鉄や電車でも、ほとんど電動車イスで行けて、どこでも利用できるのは、機会の平等が徹底しているからです。例えば、バスにリフトをつけないことが差別に

なるということです。リフトをつけないと、バスを使えない車イス市民とか、足の不自由な人はバスに乗るという平等の機会が保障されないから差別になるという発想がすごいですね。つまり、機会の平等ということが権利として保障されているんですね」と、夫は語り、それまで、「障害者差別なんてそこまで言わなくてもいいじゃないか」という気がしていた夫も、アメリカの障害者自立生活運動に実際に触れることによって、日本における障害者の機会平等のための運動の大切さを感じ取っていきました。（定藤邦子）

ありがとうございました。

カンパ、絵本・はがき・お茶菓子・切手・バザー用品のご寄贈、また、サロングッズのお買い上げなど、ありがとうございました。

カスタネット、生島将光、磯崎章一、稲垣恵雄、黒羽玲子、小西京子、里山悦子、竹村安子、富田萬里子、野村嘉寿子、平岡太、吉原和郎、和田保子、その他の方々。（敬称略）

晴れのち晴れ-118-

稲垣恵雄

□左利き

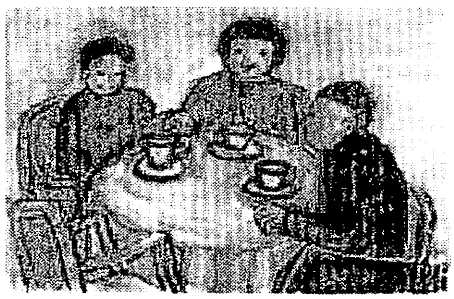
私もそうだが、ほとんどの人は右利きである。それだけに左利きの人に出会うと、以前はとても珍しく違和感すら抱いていた。でも最近はテレビを見ていてもだんだん左利きの人が多くなってきたように思う。

左利きとは申すまでもなく右手よりも左手の方がよく利く人のことで、左ぎっちょとも言う。そしてまた酒の強い人のことも左利きと言うのである。

実は私の妻も左利きである。彼女は生まれつき両手が不自由だが、特に右手が悪いのでご飯を食べるのも字を書くのも何でも左手を使っている。

先般、妻とヘルパーさんとナンバへ買い物に行った帰りにレストランに入った。その時のメニューは菜の花や筍などの春野菜を主にした料理だった。食事が終ると、妻が「コーヒーが飲みたい」と言ったので、追加注文することにした。しばらくして仲居さんがコーヒーを持って来てくれたが、コーヒーカップの取っ手が右側に向けて置いてあったのである。そうすると別の仲居さんが寄ってきて、コーヒーカップをそっと逆に向けてくれるではないか。私たちは驚いた様子で見ていると、その仲居さんは「奥さんはずっと左手で召し上がっていらっしゃいましたので…」と小さい声で言うと、おもむろに去って行った。

それにしても（見ている人はきちんと見ているんだなあ。さすがにプロはちがうなあ）と、私は感心しながらコーヒーを味わった。



創る人を支える

四歳の次男のために、私は毎週十冊ぐらいの絵本を近所の市立図書館から借りてくる。いまやインターネットでクリックするだけで本を取り寄せることができ、窓口にいけば、もうきちんとセットして用意してくれている。ありがたいことだと思う。

毎週、借りていて思うことは、よくもまあこんなに何種類も絵本があるものだということである。借りても借りても、魅力的な絵本がまだまだいっぱいある。個性あふれる作家が数え切れないくらいいるのである。

図書館には、どんなに大きな本屋もかなわないほど多くの絵本がそろっている。実は、子どもの絵本には月刊誌の形になっているものがかなりあり、これらは「書籍」ではないので、古書を含めてあらゆる本を検索できるというインターネットの書店でも扱っていない。ところが、図書館の蔵書検索ではそういう月刊誌も探すことができる。だから、まだ「書籍」の形では絵本を出したことがないという新人の作品からベテランの実験的な作品までありとあらゆる絵本を楽しむことができるのである。

なかには素人の目からみても、たいへんな労力をかけているのではないかと思う絵本がある。いったい一冊の本を書くのにどれだけ時間をかけているのだろう、こういう本を書いていて生活できるだけの印税をもらっているのだろうかと余計な心配をしたくなる。

これほど多くの絵本作家を支えているのは読者である。読者が作品を正当な価格で買うから、作家の生活が成り立っている。私はもっぱら図書館を利用しているので、あまり大きなことは言えないかもしれないが、図書館の利用率を高め、それがひいては図書館が絵本を購入する後押しになっていると考えれ

＊好評のエッセイ＊

岡　知史著

知らされない愛について　700円

ほんの少しの神に近い部分　700円

ば、私だって作家を支えている一人だと考えたい。

ところで、あるアジアの国の人と話していたら、日本のアニメや漫画にとても詳しいことに驚いた。DVDもたくさん揃えているらしい。ずいぶんとお金がかかるでしょうと聞くと、笑いながら、海賊版です、タダ同然の値段で買いましたという。

では、その国のアニメや映画はどんな感じですかと聞くと、さっぱり面白くない、誰も見ないという。果たしてそうだろうか。というより、その国には、そもそも作家が極めて少ないのではないかと思う。本も映画も違法でコピーしてしまうことが慣習になってしまっている。そういう「文化」のもとでは作家は生きていけないのである。誰も作品を正当な価格で買ってくれないからだ。

ある国で、創造的な絵本や映像作品が多く生まれているということは、そこに才能あふれる人々が多くいるということだろうが、それだけが理由ではないはずだ。才能あふれる人は他の国にもいる。ただ、そこで生み出された作品を正当に評価し対価を支払うことができる国民だけが、創造力ゆたかな個性に生活の糧を提供することができる。支える人がいてこそ、生み出す人が暮らせるのである。

（知）

「分かち合う」ことの大切さ

いつも楽しく、サロン紙を拝読させていただいています。

264号の上平さんの文章に圧倒されました。障害のある方の赤裸々な、不安、焦り、何のために生きるのかを、もっともっと発信する必要があることを、つくづく思い知らされました。外に訴えるより、自身に問いかけ、自身と闘うことがいかに大きく、大変なことか。 ハンマーで、叩かれるような衝撃でした。サロンは、人と人として、ここの共有こそが命なのですね。つらい、苦しいからこそ、理解しあうことが求められるのです。

最近知ったことですが、スウェーデンでは、「福祉」の意味は、「幸せ」ではなく、「オムソーリ」＝「悲しみの分かち合い」というそうです。そのために社会サービスがあり、租税は、苦しみを分かち合うための負担なのだそうです。 自身が受けるサービス（権利）のための負担ではなく、分かち合うための負担なのだそうです。ここに社会への貢献の意識がきちんと確立されているようです。

国家公務員が、居酒屋タクシー料金を支払い、見返りを受け取る国とは、随分違います。

上平さんの文章で、「分かち合う」ことの大切さを深めることができました。

そう簡単に分かち合えない現実に、自身の力なさや社会システムのいい加減さに地団太を踏みながらも・・・。

（脇坂博史）

Mai スウェーデン留学記 22

2度の引越し

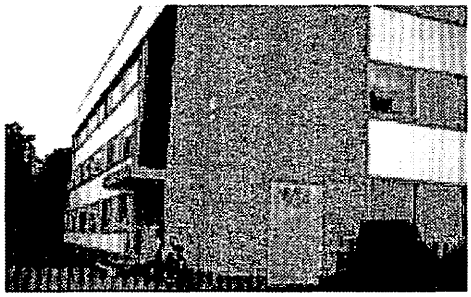
スウェーデン滞在中に私が求めたもの・・・とにかく自分が納得のいく住居でした。

6月から8月までのウプサラでの語学学校期間は、申し込んでおいた学生寮でした。これは、ウプサラ大学の学生が夏の間、帰ったり、旅行に行ったりしている間、自分の部屋を使わせてくれるものです。キッチンとシャワーが共同でしたが、ほとんど学生がいないので、私1人で独占していたようなもので、結構満足していたのでした。

さて、8月の終わりからいよいよヴェクショーに移り、そこでも学生寮でした。ヴェクショーでは、学生寮かホームステイか希望を出せるのですが、ホームステイはホスト側が毎年決まった大学しか受け入れていないこと、そして、私自身が大学1年生のとき英語を勉強するためオーストラリアに留学したとき、ホームステイで嫌な思いをしたこともあり、気楽な寮生活を希望したのでした。最初に割り当てられた寮は、大学から自転車で20分くらい離れた場所でした。

「ヴェクショー」という街の「ショー」はスウェーデン語で湖という意味で、その名の通り、周囲は大きな湖に囲まれた場所です。残念ながら今回はどうしても地図を取り込むことができず言葉だけではわかりにくいのですが、通学には、街の中心地を通り2つの大きな湖の間を縫うように走ります。散歩にはもってこいの場所ですが、活気があまり感じられません。暗い夜でもその場所を通るのは別に怖くもなかったのですが、それまで学生で賑やかなウプサラや首都らしく華やかなストックホルムに慣れ親しんでいただけにヴェクショーでの生活はちょっぴり寂しく、息抜きにストックホルムにわざわざ電車で5時間ほどかけて出かけたりしていました。

あまりのギャップにしばらくホームシックならぬウプサラシックでしたが、時間が経つにつれヴェクショーの生活にも慣れてきました。でも、1つだけどうしても我慢ができないことがあったのです。私の部屋はキッチンとリビングルームの隣にあり、同じ寮のメンバーはドイツ人とスペイン人の留学生ばかり。とにかくお酒を飲むのが大好きなドイツ人ととにかく騒ぐのが大好きなスペイン人が合流するとどうなるかは、想像できるでしょうか？　毎週寮のリビングで夜遅くまで大音量の音楽をかけてパーティーをして、飲んで、騒いで踊って・・・寮がクラブに変身します。私もそういうのは嫌いではないです



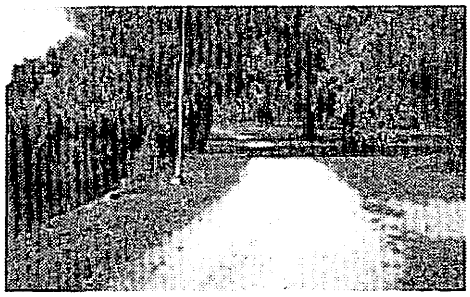
ヴェクショーでの最初の寮(外観)
大学から遠く離れた場所にこのような建物の寮が4つあります。

ウプサラでの寮の部屋。
夏の語学学校の間だけ借りていました。

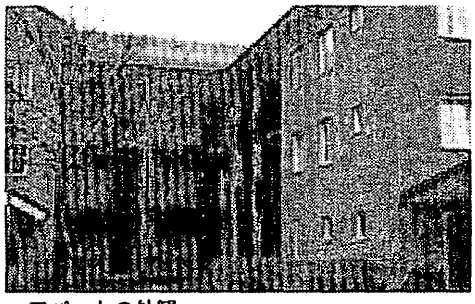
が、勉強しないといけないとき、本を読んでいるとき、語学学校で仲良くなった違う国の友達と国際電話で話しているとき、疲れたから早く寝たいと思うとき・・・うるさすぎてこの毎週のパーティーは拷問に近いものがありました。しかもその翌日の汚さは耐えられるものではありません。人が汚したものをきれいにするほどお人よしではないので、放置しておいたり、ある時は1週間くらい旅に出て、騒音から逃れたりしていたのですが、あまりの煩さに耐えきれず、とうとう、ヴェクショー大学のインターナショナル・オフィスの寮担当の人に寮を変えてくれるようにお願いしたのでした。

日本人の感覚と少し違うので、夜に音をたてるなんて非常識じゃないかって思うかもしれませんが、スウェーデン人の感覚、もしくはヨーロッパの人の感覚では、「自分達はこうやって楽しむ。でももしあなたが友達を呼んでパーティーを夜遅くまでしても別に文句は言わないよ」ということで大抵はOKなのです。それが学生寮です。

寮担当の人にも「静かな寮なんてないわ」って笑われましたが、そんなに言うならと、「今ちょうど1人アパートに住んでいて、寮に移りたがっている女の子がいる。その子と交渉して、交換したらいいんじゃない？」と連絡先を教えてくれました。早速、寮に移りたがっているドイツ人の女の子にメールを送り、お互いの部屋をチェックし合いました。



通学路
湖のそばを通っていきます。



アパートの外観
引越し先のアパートの建物です。10月から1月の初めまで住んでいました。

アパートの部屋

大学に近いアパートで、気兼ねなく過ごせるということで私はすぐに気に入ったのですが、その子は、「アパートはやっぱり話す人が少なくてちょっと寂しい」と、どうしても寮に移りたかったらしいです。ただし、このアパートには元の持主がいて、その学生が1月には帰ってくるということ・・・だから私はまた1月にはどこか寮を探さないといけないという条件があったのですが、とにかく逃れたい一心でアパートに引越すことを決めたのでした。

遠くて引越すには1人ではできないのですが、私と同じ年齢でヴェクショー大学で日本語を教えている友達が、「じゃあ手伝ってあげる。友達にもお願いして車で運べるようにしてもらうから」と引き受けてくれ、荷物を運びだすのを手伝ってくれ、車に積んでくれて、本当に大助かりしたのを覚えています。

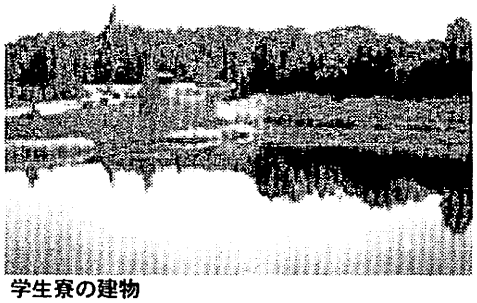
寮のみんな
全員ではありませんが・・・
中国、スウェーデン、ドイツ、フランス、アルゼンチン、フィンランドの学生達と。寮のリビングにて。

それから始まった私のアパート生活は、自由で気まま。得意の料理をちゃんと作れて、ますます料理にはまり、ストレス解消に料理を作ることを覚えてしまいました。大学にも近くて、よく友達を部屋に呼んで、料理パーティーやお泊り大会で楽しく過ごしていました。たまに隣の人が夜遅くに、修理をするのか、音がうるさいときがあって、そのときは「煩い！」と叫んだこともありましたが、平和な日々でした。引越ししたての頃、家族に住所を知らせたら、スウェーデン語の特殊文字が文字化けしていたらしく、変な記号や数字を住所だと思いこんだ家族が文字化けした通りの文字を書いて荷物を送ってきて、それを聞いたときヒヤヒヤものでした。無事に荷物が届いたから良かったのですが、ヴェクショーの郵便システムもかなり優秀だったようです。

さて、1月が近づいてくるにつれ、次の住む場所をどうするか決めないといけなくなりました。またインターナショナル・オフィスに相談のメールを送るとき、自分の希望を出しておきました。「条件は大学に近い場所」と。返事は「絶対大学に近い寮を確保しておく」ということで、決まったのが1月初め。ギリギリでしたが、鍵をもらいに行き、部屋をチェックしました。このとき、アパートと寮はそんなに離れている場所ではなかったので、私1人で荷物を移動させることはできるだろうと思っていたのですが、1月からどうしても首が動かなくなり、歩くだけで振動が首に伝わり、痛むのです。とても1人で引越しなんてできるものでもなく、日本人留学生に助けを求めたら、一番仲の良い2人の学生が手伝ってくれたのでした。とてもパワフルな女の子と、ちょっと段ボール箱を運んだだけで「腕が筋肉痛になる」と言ってしゃがみ込む男の子。引越しで役に立ったのは言うまでもなくその女の子で、男の子は「じゃあお昼ご飯を作ってくるから後で食べに来て」と言い残して去っていったのでした。もちろんお昼のパスタは美味しかったです。

この寮は、スウェーデン、ドイツ、ハンガリー、アルゼンチン、フィンランド、フランス、中国の国際色豊かなメンバーがそろう、とても個性的なメンバーでした。初日から温かく迎えてもらい、アパートとは一味違った楽しさをみんなと一緒に分かち合ったのです。

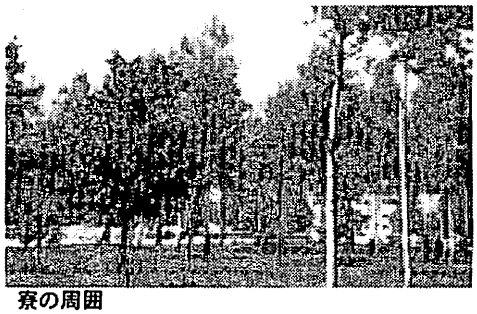
ちなみにインターナショナル・オフィスとの交渉は、スウェーデン語です。よく日本人留学生が英語で交渉してもまともに相手にしてもらえないと言っていました。



学生寮の建物
次に引越した学生寮です。
1月半ばから6月末の帰国まで住んでいました。

留学生で2回も引越したのは私くらいだと思います。ちゃんと手伝ってくれる良い友達がいたから、そういうことも可能だったわけですが。でも黙っていたらそのままです。言ったもの勝ちで、何でも自己主張しないと誰も相手にしてくれません。とりあえず何でも言ってみる、そこから解決法が出てくる・・・というのが、ヨーロッパ方式でしょう。私の好きな言葉の1つに「郷に入れば郷に従え」があります。日本を飛び出して、違う国で生活するときいつも「郷に入れば郷に従え」の精神でその国に溶け込んでいきます。そうすると、違った自分を発見できるでしょう。日本にいるときの私とスウェーデンにいるときの私では全然性格も違うのです。

（清原　舞）



寮の周囲
夏は白樺がまぶしいくらいにきれいです。
自然がたくさんある散歩には素敵な場所です。

SALOON

8月はどこのサロンの、どのテーマがお気に入りですか。いい出会いしませんか。

■「サロン淀川」8月の出会い

日　　時：8月17日（日）午後1時30分～4時
内　　容：病気に対する予防
ゲ ス ト：木崎昌弘氏
　　（環境改善による健康アドバイザー）
会　　費：なし
場　　所：淀川区民センター「やすらぎ」
　　大阪市淀川区三国本町2－14－3
問い合せ先：淀川区社協（ボランティア・ビューロー）☎06－6394－2900
E-mail：sorajii@iris.eonet.ne.jp

■「サロン・にしよど」8月の出会い

日　　時：8月23日（土）
内　　容：未定
会　　費：なし
場　　所：西淀川区在宅サービスセンター
　　「ふくふく」大阪市西淀川区千船2-7-7
　　☎06－6478－2941
問い合わせ先：中本☎090－9864－9678

■サロン「アイ」8月の出会い

日　　時：8月9日（土）午後1時30分～4時
内　　容：童謡・唱歌
出 演 者：視覚障害者コーラスグループ「セキレイ」
　　アコーディオン奏者＝山本汎昭氏
会　　費：なし
場　　所：生野区在宅サービスセンター
　　「おかちやま」2階ボランティアルーム
　　大阪市生野区勝山北3－13－20
問い合せ先：生野区社協（ボランティア・ビューロー）☎06－6712－3101
○お知らせ：サロン「アイ」だよりの音訳テープが出来ます。ご希望の方は、西浦まで。
　　☎06－6757－8574

■「サロン・にし」8月の出会い

日　　時：8月9日（土）午後2時～4時
内　　容：西長堀駅前の放置自転車問題を考える集い
場　　所：西区在宅サービスセンター「ながほり」
　　大阪市西区新町4－5－14
　　☎06－6539－8075
会　　費：なし
問い合せ先：関口　☎090－4281－5641

■《てくてく・すみよし》8月の出会い

日　　時：8月9日（土）午前10時30分梅田集合
内　　容：アサヒビール吹田工場見学会＆昼食会
会　　費：200円（共催金）
　　交通費と昼食は別途、個人負担。
申し込み・問い合わせ先：
　　山本篤江☎06－6692－8411
　　携帯090－5168－5977

■「サロン・つるみ」8月の出会い

日　　時：8月3日（日）午後1時30分～4時
内　　容：昔懐かしいナツメロや童謡を歌いながら楽しく「歌体操」
ゲ ス ト：歌体操ボランティアグループ
　　「カナリヤ」様
場　　所：鶴見区民センター3階
会　　費：なし
問い合せ先：鶴見区社協（ボランティア・ビューロ）
　　奥井☎06－6913－7070

■「サロンいたみ」8月の出会いはお休みです

サロンの 童謡♪絵はがき
5枚1組￥180-

美智子のこんな話

岸田美智子

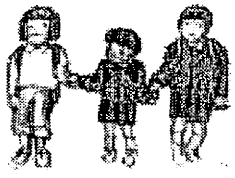
住吉区アクションプラン報告

高齢・障害者部会では、最近、今後の活動内容について議論を重ねています。なかなか高齢者と障害者が一緒に取り組んでいけるテーマは難しいし、住吉区民のだれもが参加しやすい形も模索しているので結論がでない状態が続いていました。でも、今回の6月の定例会では「トイレ貸します」運動の発展路線でスタンプラリーを行ってはどうかという案がでました。スタンプラリーを通して「トイレ貸します」運動の賛同施設（約90ヵ所）の啓発、拡大を行い、それとともに地域のバリアになっている場所や新たなふれあいの場所などの情報の収集を行う。身近な地域の福祉施設を訪れ交流し、地域を歩くことにより、すべての住民にとって暮らしやすい町について考えるきっかけを作りたいという目的で行っていきたいという提案がありました。

また、「まいど」からの提案としては、「介助DAYを作ろう」というテーマで提案しました。目的としては、ケアという問題は高齢者と障害者の共通課題であり、子育て、病気、怪我など、広く考えればすべての人の課題でもあります。住吉区の地域全体で考えていくきっかけ作りの日として設定したいのです。そして今、福祉の現場で働く人たちの人材不足が深刻になってきています。このような危機的な状況を変えていくためのシステム作りの1歩としても「介助体験DAY」（仮）を設けていきたい。また、この日にトイレマップの配布などもやっていきたい。

以上のような目的で提案しているところです。スタンプラリーは、10月頃に行う予定で案が出ています。この事業計画は、大阪市のフロンティア事業に応募することになりました。今後、この2つの提案がどのような展開になっていくのかとても楽しみです。とにかく議論ばかりではなく、1歩を踏み出していけたらと期待しています。

寄りみち



■童謡♪絵はがき・仲よし小道。三苫やすしの詩に河村光陽がメロディを付けてレコード会社へ持ち込み、全国的に広まったレコード童謡の代表曲の一つ。作詞者・三苫やすしは福岡県の教師でした。歌詞にもあるように、昭和初期の福岡には小さな板橋がいくつもあり、それを子どもたちが渡って遊んでいました。光陽の生家も福智川や彦山川に近く、板橋が架かっていました。同じ地方の教師であった作曲者・河村光陽にとって、親しみ深い光景であり、共感するところが多かったようです。みずみずしい自然の中で遊んだ少年の日を思い描き、自然や人情に育まれた詩情や、子どもたちへの想いは作品の中に息づいています。（石）

<サロン・あべの>VOL.265　発行：平成20（2008）年7月19日　定価￥100
編集人：<サロン・あべの>運営委員会　表題：中西利香・筆　文中イラスト：石田美禰子
事務局：〒545-0021 大阪市阿倍野区阪南町6－3－26 冨田慶子方<サロン・あべの>
TEL・FAX 06-6691-1028　郵便振替口座：サロン・あべの 00950-9-26941
印　刷：セルフ社 〒546-0044 東住吉区北田辺町4-23-2 ミスターDビル2F TEL06-6719-8212
ホームページ：http://pweb.sophia.ac.jp/oka/salon/「サロン　あべの」でも検索できます

発行人：関西障害者定期刊行物協会［大阪市城東区東中浜2-10-13緑橋グリーンハイツ1F］

一九九一年九月三日第三種郵便物認可（毎日発行）